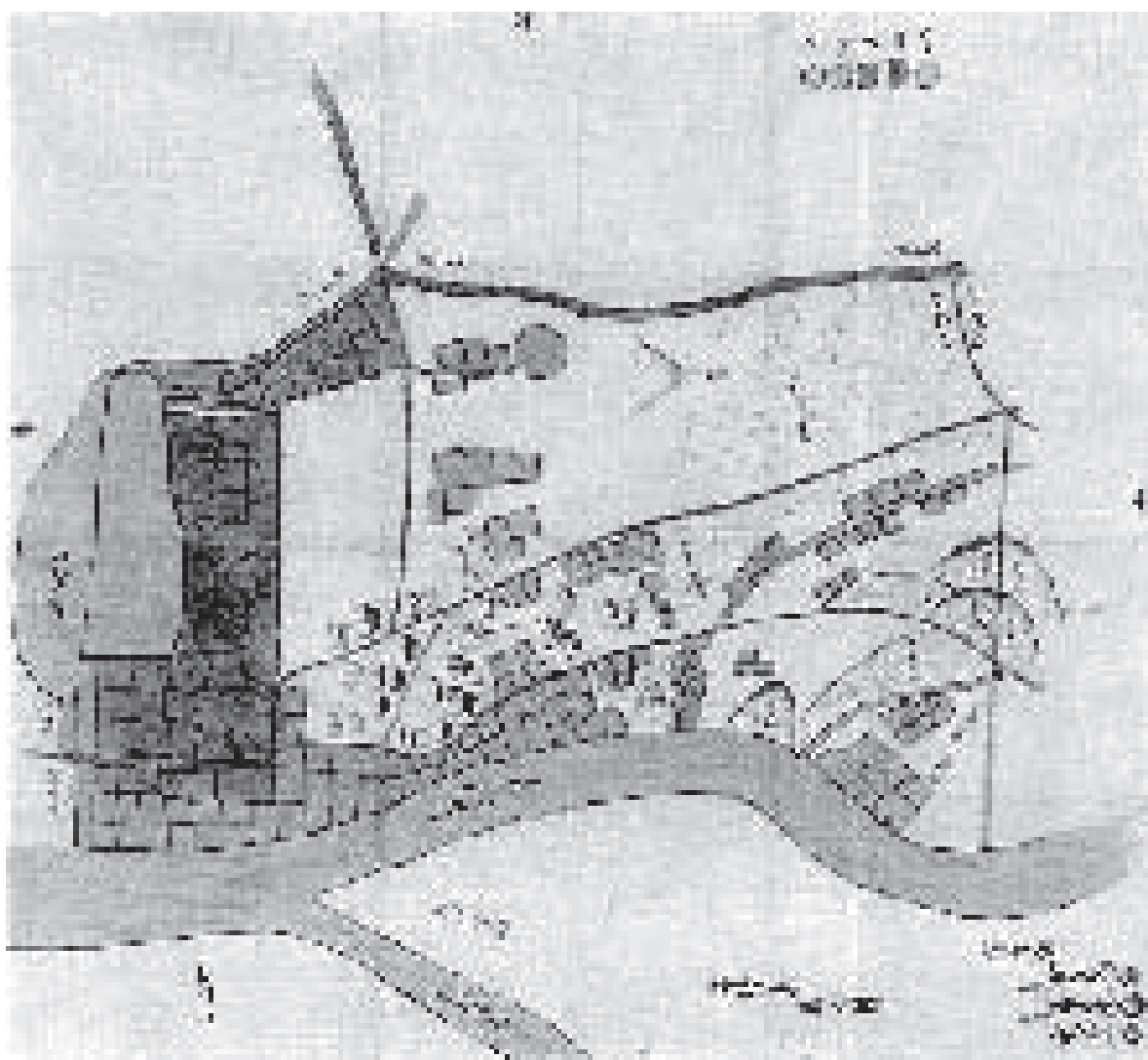


# 今町遺跡

## 現地説明会資料

2000.10.14(土) 13:30~



「今村絵図（文化8=1811年）」（『豊田の古絵図』より転載）

(財) 愛知県教育サービスセンター

愛知県埋蔵文化財センター

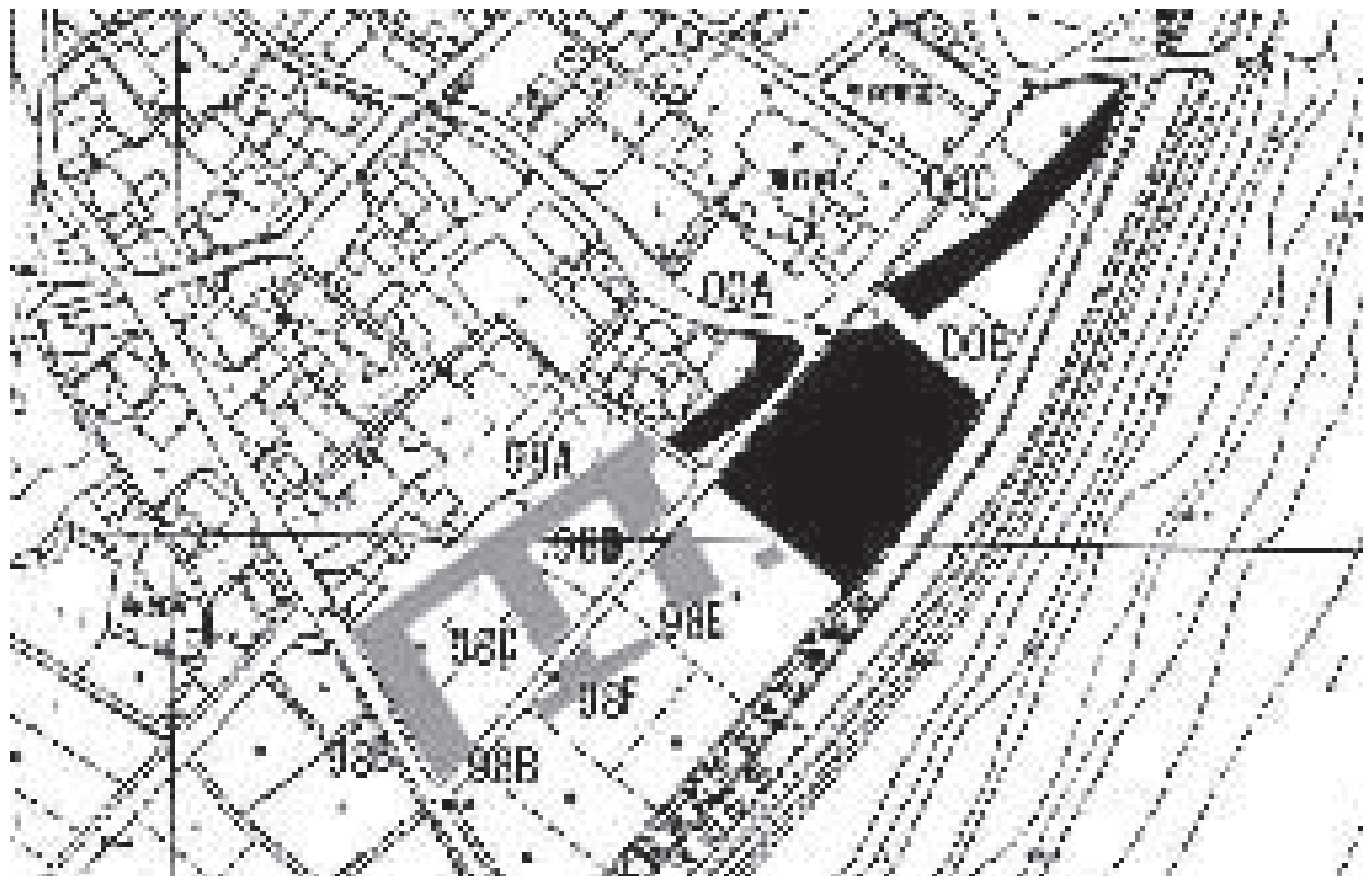
ホームページ <http://www.maibun.com>

## 1 遺跡の概要

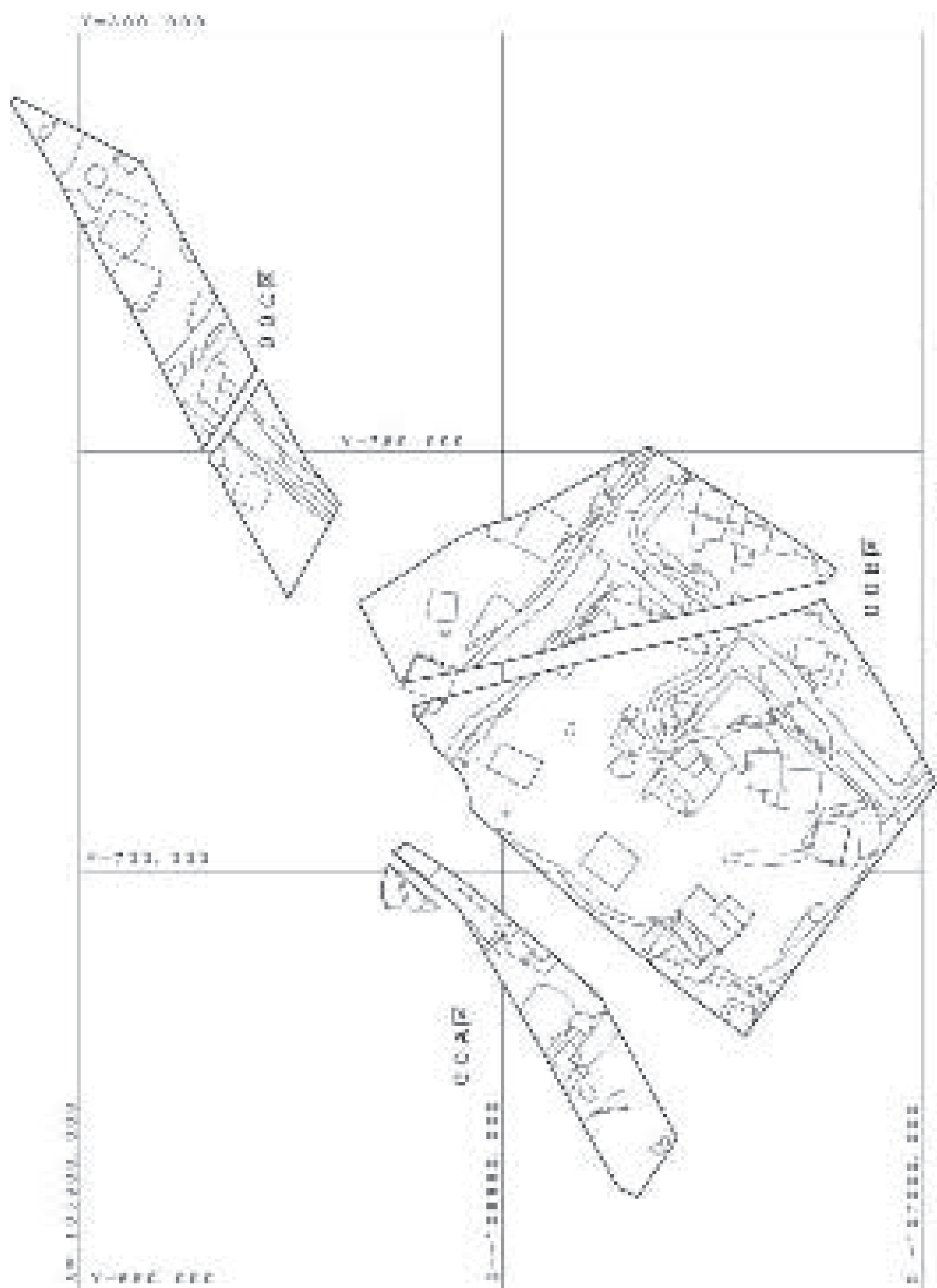
今町遺跡は、愛知県豊田市今町に所在する縄文時代から江戸時代までの複合遺跡で、矢作川右岸の碧海台地上に立地しています。発掘調査は、日本道路公団名古屋建設局による第二東海自動車道建設に伴う事前調査として、平成12年6月から10月までの予定で当センターが行っています。調査面積は4,000m<sup>2</sup>で、A区(400m<sup>2</sup>)、B区(2,900m<sup>2</sup>)、C区(700m<sup>2</sup>)の3つの調査区分けて実施しています。すでに、平成10年度にも当センターによって発掘調査(調査面積4,400m<sup>2</sup>)が実施されており、今回が2度目になります。A区の調査はすでに終了し、現在B・C区の調査中です。

前回の調査によって、縄文時代中期～後期、奈良時代、鎌倉時代～室町時代、戦国時代～江戸時代初頭、江戸時代の5つの時期の遺構と遺物が確認されました。今回の調査においては、飛鳥時代～奈良時代、鎌倉時代、戦国時代、江戸時代の4つの時期の遺構と遺物を確認しています。特に、飛鳥時代～奈良時代の<sup>たてあなじゅうきよ</sup>竪穴住居が重複する形ではありますが、B区だけで60棟以上検出されています。また、鎌倉時代の<sup>ほったてぼしらたても</sup>掘立柱建物数棟、戦国時代の屋敷を区画すると思われる溝も確認されています。

前回の発掘調査で確認された縄文時代の遺構と遺物については、今回の調査では確認されていません。



調査区位置図 (1 : 2,500)



今町遺跡主要遺構配置図 (1:600)

## 2 地理的環境

今町遺跡は、豊田市今町字元屋敷に所在しています。この地は、トヨタ自動車本社方面から伸びる台地の端に位置し、碧海台地と呼ばれる台地面が矢作川右岸に接する場所にあたります。

## 3 歴史的環境

今町遺跡の周辺には数多くの遺跡が矢作川に沿うように立地しています。当センターでも第二東海自動車道に伴う発掘調査でこれまで本川遺跡・川原遺跡・郷上遺跡・天神前遺跡・水入遺跡の調査をしてきました。これら遺跡の調査も踏まえて歴史的環境を見ていきたいと思ひます。

### 1 旧石器時代

人類が誕生した後、土器を使用するようになる1万2000年前くらいまでを旧石器時代と呼びます。この地域に人々が暮らし始めたのは、後期旧石器時代（約3万年前～）に入ってからで、水入遺跡（渡刈町）のナイフ形石器、小猿投遺跡（今町）の有茎尖頭器、河合遺跡（河合町）・大明神B遺跡（渡刈町）の細石器などから約2万年まえからと考えられます。

### 2 縄文時代

人々が土器を使用するようになると食べ物の煮炊き・あく抜きが行えるようになり食料資源の対象が広がりました。水入遺跡では、早期（約9000年前）の焼けた土坑・中期の竪穴住居・晩期の土器棺などが確認されています。

### 3 弥生時代

稲作が開始される頃、人々は生活の中心を川沿いの平野部やそこを臨む台地部へと移動したようです。川原遺跡（鴛鴨町）では中期の方形周溝墓や竪穴住居を多数検出し、また後期には大型墳丘墓が築造されたことがわかってきています。他にも本川遺跡（永覚町・幸町）では中期から後期にかけての竪穴住居が、神明遺跡（鴛鴨町）では後期の竪穴住居が確認されています。

### 4 古墳時代

古墳時代も中期（5世紀頃）になると矢作川沿いにも多くの集落が展開し、有力者による古墳の造営やそのほかの土木工事が行われるようになります。

今町周辺の代表的な古墳としては、豊田大塚古墳があります。この古墳は6世紀初頭のもので考えられており、天冠を始めとする鉄地金銅張り製品など数多くの副葬品を伴っていることから矢作川の交通を押さえ

今町遺跡と周辺の遺跡（1：2,500）



- |         |         |         |         |          |
|---------|---------|---------|---------|----------|
| 1 本陣古堀  | 2 二ノ目古堀 | 3 三ノ目古堀 | 4 四ノ目古堀 | 5 五ノ目古堀  |
| 6 六ノ目古堀 | 7 七ノ目古堀 | 8 八ノ目古堀 | 9 九ノ目古堀 | 10 十ノ目古堀 |
| 11 陣屋土倉 | 12 陣屋土庫 | 13 陣屋土蔵 | 14 陣屋土庫 | 15 陣屋土蔵  |
| 16 陣屋土蔵 | 17 陣屋土蔵 | 18 陣屋土蔵 | 19 陣屋土蔵 | 20 陣屋土蔵  |
| 21 陣屋土蔵 | 22 陣屋土蔵 | 23 陣屋土蔵 | 24 陣屋土蔵 | 25 陣屋土蔵  |
| 26 陣屋土蔵 | 27 陣屋土蔵 | 28 陣屋土蔵 | 29 陣屋土蔵 | 30 陣屋土蔵  |
| 31 陣屋土蔵 | 32 陣屋土蔵 | 33 陣屋土蔵 | 34 陣屋土蔵 | 35 陣屋土蔵  |
| 36 陣屋土蔵 | 37 陣屋土蔵 | 38 陣屋土蔵 | 39 陣屋土蔵 | 40 陣屋土蔵  |
| 41 陣屋土蔵 | 42 陣屋土蔵 | 43 陣屋土蔵 | 44 陣屋土蔵 | 45 陣屋土蔵  |
| 46 陣屋土蔵 | 47 陣屋土蔵 | 48 陣屋土蔵 |         |          |

た有力者の存在が考えられます。また、水入遺跡では矢作川に並行する形で台地の基盤層を掘り込んだ深さ 3 m 以上、全長 200 m 以上の巨大な溝が作られていることからこの地域の人々と矢作川との密接なつながりをうかがうことができます。

このほか集落遺跡としてカマドの出現期の竪穴住居を含んだ本川遺跡や神明遺跡があります。

## 5 古代

飛鳥時代から奈良時代にかけてこの地域では多くの集落が営まれるようになりました。水入遺跡や当遺跡など竪穴住居が広がっていたことが確認されています。律令制<sup>りつりょう</sup>が開始されると当遺跡あたりは賀茂郡<sup>かも</sup>に属していました。

## 6 中世

鎌倉時代になると当遺跡あたりは「衣」<sup>ころも</sup>と呼ばれ、高橋荘<sup>たかはしのしょう</sup>に属し中条氏の支配を受けていました。水入遺跡ではこの頃共同墓地が営まれ、200 基以上の土坑墓が確認されています。

戦国時代になるとこの地域では松平氏・鈴木氏・三宅氏などの土豪<sup>どごう</sup>が勢力をのぼし、今川氏・織田氏・松平氏の勢力の接点にもあたったため絶えず戦が繰り返されていました。郷上遺跡（鴛鴨町）・天神前遺跡（鴛鴨町）ではこの時代の鴛鴨村の様子が確認されています。また、当遺跡に隣接する常行院<sup>じょうぎょういん</sup>もこの時期（1543 年）創建されています。

## 7 近世

江戸時代になるとこの地域の地名「衣」が「拳母」に改められ、この地も根川六か村の今村として拳母藩領に属していました。江戸時代の今村では矢作川の渡船が営まれ、対岸の渡合村や岡崎藩領の細川村とを結んでいました。17 世紀には現在のトヨタ町付近の地域をめぐって拳母七町・根川六か村と渡刈村・鴛鴨村・大林村との間で山境論が起り、「論地が原」の名を残すほど解決に時間がかかる争いとなりました。

## 8 明治から現代へ

明治から大正にかけて拳母町は養蚕・製糸業を中心に発展を遂げていましたが、昭和に入ると生糸の需要にかげりが見え始めたため、拳母町では新たな工場の誘致に乗り出し、昭和 13 年トヨタ自動車工業株式会社拳母工場を「論地が原」に誘致し「自動車のまち豊田」の第一歩を踏み出しました。昭和 26 年、拳母町は「拳母市」となり、昭和 34 年 1 月、市名が「豊田市」に変更されました。市制開始以来の町村合併などで市域は拡大し県下 2 番目の面積となっています。現在では人口も県下 3 番目となり、平成 6 年には「地方拠点都市地域」にも指定されています。

## 4 検出遺構

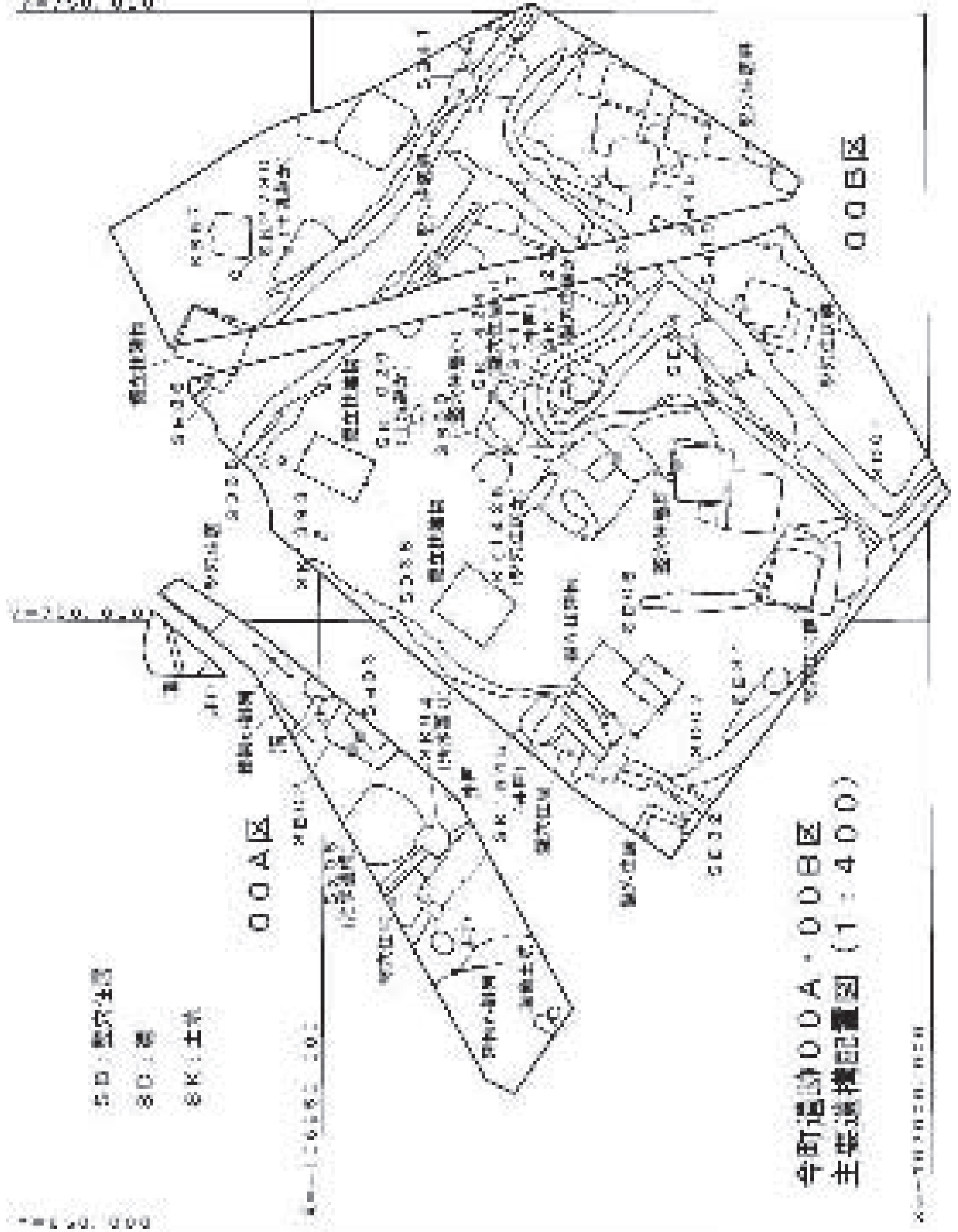
今回の調査でこれまでに確認された遺構としては、まず飛鳥時代～奈良時代の竪穴住居が重複する形ではありますがB区だけで60軒以上（今回の調査区全体では80軒以上）が確認されています。住居の形態はほぼ隅円方形を呈し、一辺が4～7mほどの規模になります。一部の住居からは、壊されていますがカマドが確認されています。竪穴住居以外には、やや新しい時期になるとと思われる掘立柱建物が1棟検出されています。鎌倉時代の遺構としては、掘立柱建物数棟、土抗墓と思われる土坑数基、戦国時代では、井戸2基、池状遺構1基、屋敷地を区画すると思われる溝数条、江戸時代では、井戸3基、汚水溜りと思われる土坑1基、屋敷地を区画する溝数条、廃棄土坑数基を確認しています。なお、戦国時代から江戸時代の屋敷地内で検出された柱穴の断面で柱痕が確認されていることから、建物が建っていたことが考えられます。

前回の発掘調査で確認された縄文時代中期～後期の遺構については、今回の調査では確認されていません。

## 5 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、コンテナ約50箱ほどになります。竪穴住居からは、飛鳥時代から奈良時代の坏身・坏蓋・壺・甕などの須恵器や、製塩土器・土錘・甕などの土師器が出土しています。また、柱穴や土坑などからは、鎌倉時代の灰釉系陶器（椀や皿など）や伊勢型鍋などの土器が出土しています。戦国時代から江戸時代の遺物としては、瀬戸・美濃産陶磁器や常滑産陶器、瓦、鍋や皿などの土師質製品などが出土しています。これ以外にも出土量は少なくなりますが、肥前産磁器や、銭貨やキセルなどの金属製品も確認されています。器種としては、椀や皿、播鉢、鍋などの日常生活に密着した遺物の出土が多いように思われます。

また、遺構の埋土から極少量ではありますが石器が出土しています。しかし、製品はほとんど見られず、石核（コア）や剥片（フレイク）が大半を占めています。石材としては、チャート、頁岩、黒曜石などが見られます。これらの石器の時期については、まだ正確ではありませんが、縄文時代である可能性が高く、前回の調査で確認されている遺構や遺物と一致します。しかし、旧石器時代と思われるものも一部で見られますので、さらに古い時代に今町周辺に人々が暮らしていたと考えることができそうです。





## 6 調査成果

今回の発掘調査により、飛鳥時代～奈良時代、鎌倉時代、戦国時代、江戸時代の4つの時期の遺構・遺物を確認することができました。

まず、飛鳥時代～奈良時代の竪穴住居が、重複した形ではありますが、B区だけで60棟以上検出されたことです。比較的短い期間に何回か建て替えられてはいますが、矢作川のこの地に1300年以上も前から人々が生活していたことが確認されたことは、貴重な資料を得ることができたと思います。

その後、この地に人々の生活の痕跡を確認できるのは、鎌倉時代になります。他の時代ほど遺構は密ではありませんが、居住域や墓域などとしてある程度の集落の広がりを想定することができます。

また、戦国時代以降もこの地は、居住域や水田として利用されていたことが、検出された遺構・遺物によって確認されています。

### 【用語解説】

- 飛鳥時代（あすかじだい）**：時代区分の1つで、592年の推古天皇の即位から710年の平城京遷都までをさす。645年の大化改新を境に前後に区分される。
- 土坑墓（どこうぼ）**：遺骸を埋葬した土坑の墓。
- 土 錘（どすい）**：主に魚網・釣り針用の土製のおもり。
- 製塩土器（せいえんどき）**：海水を濃縮した塩水を入れて加熱し、塩をつくる土製の容器。
- 灰釉系陶器（かいゆうけいとうき）**：東海地域を中心とする中世を代表する無釉の陶器。器種としては、椀・皿・鉢・壺などがあり、椀を山茶椀、皿を山皿ともいう。
- 伊勢型鍋（いせがたなべ）**：中世前期に当地域で一般的に利用されていた煮沸具。
- 石 核（せっかく）**：石器を作るためにもとになる原石を割った時に、石の中心側に残るかたまり。コアともいわれる。
- 剥 片（はくへん）**：石器を作るために原石から薄く剥ぎとられた石片。フレイクともいわれる。

今町遺跡発掘調査関連写真1



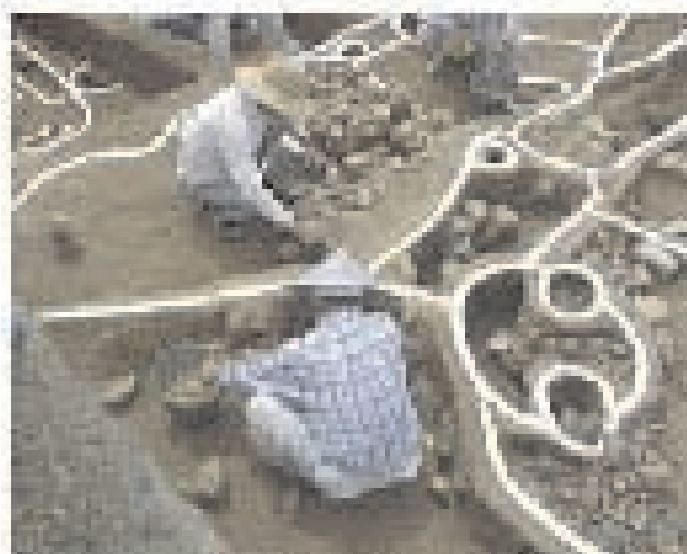
000区伊表十石遺 (南西から)



000区伊表高尾遺 (南東から)



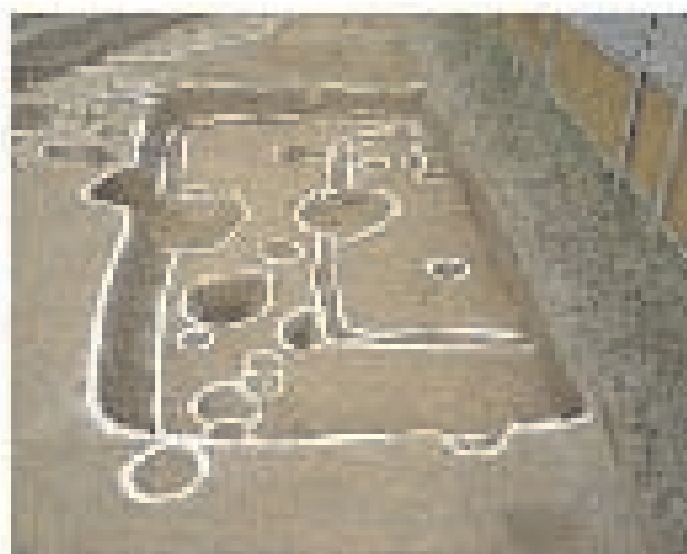
000区伊表高尾遺 (南東から)



00A区伊表高尾遺 (F010/G)



000区伊表高尾遺 (北東から)



00A区伊表高尾遺・08発掘状況 (F010/G)

今町遺跡発掘調査報告写真2



00B区8B4-1 須賀出土状況 (北東から)



00B区8B4-5 遺構出土状況 (南から)



00B区8B5-7 遺構出土状況 (西から)



00B区8K10-20 122号から



00A区8X010 (西から)



00A区8K6-4 (北東から)

日本の主なできごとと今町遺跡

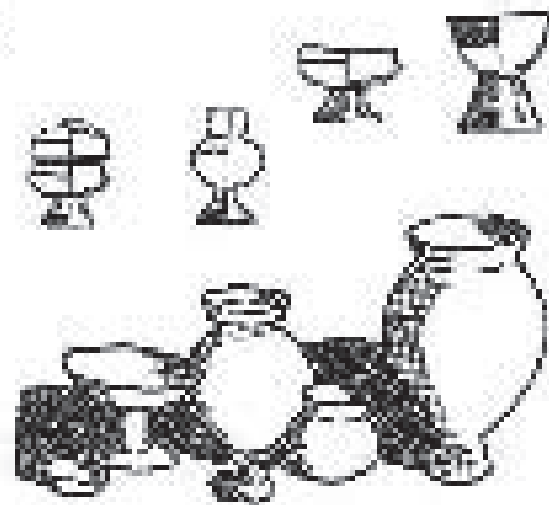
	西暦	日本の主なできごと	今町遺跡の発掘成果より
旧石器	約 10 万年前	人類が定住始める	今町遺跡周辺に人が姿を現す (98年発掘より)
	30000 年前	ナイフ形石器が作られる	
縄文	15000 年前	弓矢と土器の使用が始まる	今町遺跡周辺に人が住む ・ 型穴住居 ・ 須弥場などの遺物
	B.C.400 頃	稲作と金属器の使用が始まる	
古	2 世紀半ば	争いが多発する (倭国大乱)	今町遺跡周辺に人が住む ・ 型穴住居 ・ 須弥場などの遺物
	300~	大和王権の成立	
中	6 世紀半ば	仏教の伝来	今町遺跡周辺に人が住む ・ 型穴住居 ・ 須弥場などの遺物
	598	聖徳太子が推古天皇の摂政となる	
古	645	中大兄皇子らが蘇我氏を滅ぼし天 皇を遷す (大化の改新)	今町遺跡周辺に人が住む ・ 型穴住居 ・ 須弥場などの遺物
	710	平城京遷都	
中	794	平安京遷都	今町遺跡周辺に人が住む ・ 型穴住居 ・ 須弥場などの遺物
	969~	源氏と平氏が争いを始める	
近	1086	白河上皇が院政をはじめ	今町遺跡周辺に人が住む ・ 型穴住居 ・ 須弥場などの遺物
	1167	平清盛が太政大臣に就任する	
世	1192	源頼朝が鎌倉に幕府を開く	今町遺跡周辺に人が住む ・ 型穴住居 ・ 須弥場などの遺物
	1274	文永の役	
中	1381	弘安の役	今町遺跡周辺に人が住む ・ 型穴住居 ・ 須弥場などの遺物
	1334	建武の新政	
世	1336	南北朝の戦乱が始まる	今町遺跡周辺に人が住む ・ 型穴住居 ・ 須弥場などの遺物
	1338	室町幕府が成立する	
世	1476	比叡の乱が始まり戦国の世となる	今町遺跡周辺に人が住む ・ 型穴住居 ・ 須弥場などの遺物
	1580	信長と秀吉の戦い	
世	1575	長篠の戦い	今町遺跡周辺に人が住む ・ 型穴住居 ・ 須弥場などの遺物
	1682	本陣寺の礎	
世	1690	徳川秀吉の全国統一	今町遺跡周辺に人が住む ・ 型穴住居 ・ 須弥場などの遺物
	1600	関ヶ原の戦い	
世	1603	江戸幕府の成立	今町遺跡周辺に人が住む ・ 型穴住居 ・ 須弥場などの遺物
	1639	鎖国完成	
世	1853	ペリー来航	今町遺跡周辺に人が住む ・ 型穴住居 ・ 須弥場などの遺物
	1868	明治維新	
世	1912	大正時代始まる	今町遺跡周辺に人が住む ・ 型穴住居 ・ 須弥場などの遺物
	1926	昭和時代始まる	
世	1989	平成時代始まる	今町遺跡周辺に人が住む ・ 型穴住居 ・ 須弥場などの遺物

## 用語解説

### 須恵器と土師器(すえきとはじき)

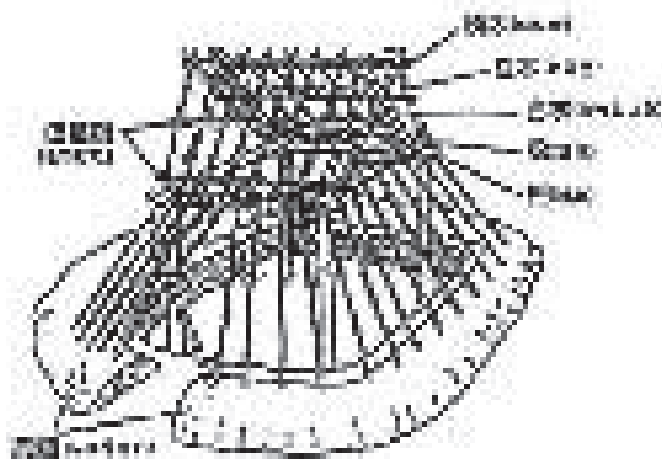
須恵器とは古墳時代中葉末以降に日本で生産された陶質の土器を言います。須恵製の技術は朝鮮より伝わったとされています。

土師器とは粘土土器の総称をくむ土器で古墳時代以降に使用されたものです。須恵器と違って基本的には野焼きで赤っぽい色をしています。



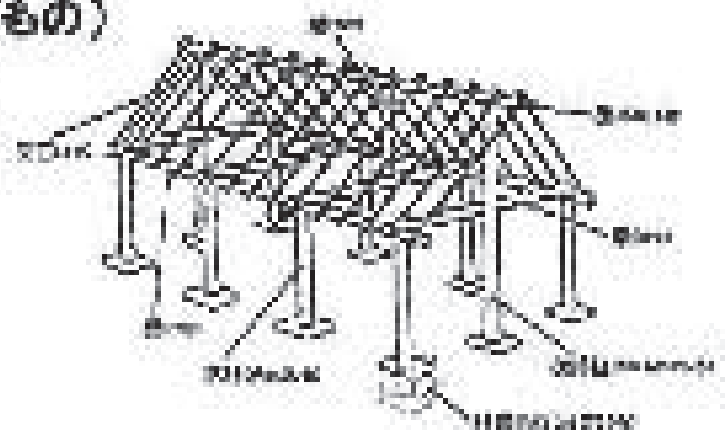
### 竪穴住居(たてあなじゅうきょ)

地面を掘りくぼめ、その底面を平らにして床をつくり、その上に屋根をかいた構造をもつ住居です。本国には、ピラミッド・住居などがあり、表面が青く塗みかためられています。このような住居は世界各地で見られます。旧石器時代後期の遺跡から発見され、新石器時代以降の代表的な住居形態です。



### 竪立柱建物(ぼったてはしらたてもの)

地面に直立柱を立てて屋根を築きかけたもので、内部に、小石や平石をおくものもみられます。



本日は、現地説明会にご参加を頂き、誠にありがとうございました。肥後県歴史文化財センターでは、最新の発掘現場のようすやさまざまな情報をホームページでお知らせしています。右側のアドレスにお気軽にアクセスしてください。